得珠院日漸上人 歎徳文

慎敬而　南無本門寿量本尊南無妙法蓮華経、南無久遠実成本師釈迦牟尼仏、南無末法有縁大導師高祖日蓮大菩薩、当山第二祖日向聖人以来歴代之諸聖人、別而一乗擁護山門守護之諸天善神智見照鑑の御宝前に於て、清浄の大衆と倶に本化別頭の法筵を張り、以て身延山大学初代学長、立正大学名誉教授、大僧正得珠院日漸上人身延山学園葬を厳修し奉る。

状を案ずるに、上人大正二年三月七日兵庫県出石町結田庄宮崎長造の三男として生る。幼名は修造、資性英知、幼くして出塵の志を抱き、大正十一年九才にして出石町本高寺住職谷垣英定師に就いて得度、膝下にあって師厳道尊仏道修行に励む。昭和六年豊岡中学校を卒業、青雲の志を抱いて立正大学に入学、昭和十二年文学部宗学科を卒業、研究科に入学、英修と改名。翌十三年応召北支方面に従軍、勲八等白色桐葉章を下賜さる。従軍中、偶々余暇ありて外出、一書店に入り仏書新刊本の中に布施教授著涅槃宗の研究を見出し驚喜感

激、若し幸にして九死に一生を得て生還する事を得ば再び大学に於て学を究めんと心中秘かに決意す。

昭和十八年召集解除、四月立正大学主事補に就任、香風学寮副寮監に就任。昭和十九年予科講師となり、宗門史の研究を志す。昭和三十四年立正大学仏教学部教授、更に仏教学博士課程教授となり法器育成に努む。昭和二十三年東京秋川市宝清寺住職、三十年師跡を継いで本高寺に入寺す。

昭和定本日蓮聖人遺文編纂委員を始め、日蓮聖人遺文辞典、日蓮宗事典、日蓮教団史、日蓮宗寺院大鑑等の編纂委員を勤む。波木井南部氏事跡考を著し従来身延山に於て考証の及ばざりし諸点に関し、綿密なる考証をなし広く識者より注目せらる。

次いで宗門史の権威影山教授、不受不施派出身の坂本教授の助言により、不受不施派の研究に力を注ぎ、禁制不受不施派の研究、博士論文不受不施派の源流と展開を著し、望月学術賞を受賞す。

不受不施は宗祖の根本精神より発する重大問題であるにも不拘、充分なる研究がなされず、上人の研究はこの空白を充たすべく真に時宜を得たり。

日蓮宗高等試験委員、日蓮宗々宝審議委員、立正大学図書館長、立正大学評議委員、日蓮宗現代宗教研究所長、日本印度学仏教学会、日本仏教学会理事、日蓮宗由緒霊跡審議委員長等の要職を歴任す。殊に日蓮宗勧学院長として勧学院の充実を図る。

昭和五十八年、日蓮宗法功賞を受賞、更に勲四等旭日章、日蓮宗綜合財団賞を受賞す。

上人若年時代より老後祖山に於て宗祖への給仕読経を念願す。偶々、里見学頭の急逝の後を襲い昭和六十年四月身延山短期大学学頭に、仝六十三年学長に就任、多年の宿願実現す。学長就任後は宗祖への給仕朝勤出座を第一とし、晩年は喘息による呼吸困難にもめげず毎晨朝の勤行、大本堂まで約三百米の長廊下の行列往復を欠かす事なく勤め、又学内の研究向上を図り、四年制大学昇格に関しては酸素ボンベを携行して文部省に赴く。平成七年待望久しきに亘りたる四年制大学昇格認可に伴い身延山大学初代学長に就任、学園の充実発

展に努むるも、屢々呼吸困難を来たし体調全からず遂に平成八年三月を以て学長職を辞し名誉教授に推さる。宗門は上人の為宗為法の学功殊に法器育成の学徳に対し大僧正を贈りその功を讃う。

上人道念堅固、無欲恬澹、只管学を究むるを無上の楽しみとし、道交温く濃やかに後進、学徒の指導懇切なり。酒を好み酔て些も乱れず、飲むに随って頭脳冴え、理路整然たり。恩師影山先生の遺業新訂日蓮宗年表を発刊し、宗史研究に遺憾なからしめ以て学恩に報ず、真に知恩報恩の人と云うべし。寺庭にあっては昭和十九年師範谷垣上人次女慈子と結婚、琴瑟相和し二男あり。長男英一師は師父の跡を継いで本高寺の法灯を継承し寺檀和合、既に開宗七百五十年記念事業諸堂改修を円成し山門隆昌す。上人退職後本高寺学室にあって書籍とり圍む中に床を設け、体調に随って猶学究に努め、自適の中に過ごしつゝありしが、去る八月九日溘焉として化を霊山に遷せり、世寿八十五才、法臘七十五年なり。嗚呼悲しい哉。

老衲日漸上人と立正大学同学にして而も晩年共に身延山に住し毎朝旧交を温む。道交実に六十年に垂んとするその因縁の深き道友なり。先に同学誕山片桐海石本地院日泉上人本葬の払を把り、今又日漸上人学園葬の払を執る、正に九腸を断つの思い、言う処を知らず、今は只生前行業徳香の一端を述べ以て歎徳とす。

得珠院日漸上人増道損生位隣大覚　若親近法師速得菩薩道　隨順是師学得見恒沙仏　在々諸仏土常与師俱生　化一切衆生皆令入仏道

南無妙法蓮華経

維持平成九年十一月二十日

身延山総務
学校法人身延山学園理事長
藤井教雄